

餓死の島をなぜ語るか

メレヨン島生還者たちの回想記

一ノ瀬俊也

Why Talk About an Island Where Soldiers Starved to Death? : Reminiscences of Survivors from Mereyon Island

はじめに

- ① 遺族に最期の様子を語る
- ② 戦死者の死、そして戦争の意義とは何か
- ③ 戦後五〇年・一兵士の語り
- ④ 戦後日本はどうとらえられたか
おわりに

【論文要旨】

太平洋戦争中、補給を断たれて多くの餓死・病死者を出したメレヨン島から生還した将校・兵士たちをして体験記の筆をとらしめたのは、死んだ戦友、その遺族に対する「申し訳なさ」の感情であり、そこから死の様子が描かれ、後世に伝えられることになった。あるいは自己の苛酷な体験を「追憶」へ変えたいというひそかな願いもあった。自己の体験をなんとか意義付けたい、しかし戦友の死の悲惨さは被い隠せない、と揺れる心情もみてとれた。このように生還者たちの記した「体験」の性格は多面的であり、容易に単純化・一本化できるような性質のものではない。戦後行われてきた戦死者「慰霊」の背後には、そうした複雑な思いがあった。

いくつかのメレヨン体験記を通じて浮かびあがってきたのは、「昭和」が終わり、

戦後五〇年以上たつてなおやまない、〈戦争責任〉への執拗な問いであった。その矛先は、時に天皇にまで及んだ。たとえそこで外国への、あるいは己れの戦争責任が問われることがなかったとしても、「責任を問うこと」へのこだわりや「死んでいく者の念頭に靖国はなかつたろう」という当事者たちの文章は、戦後日本における「先の戦争」観の実相を問ううえでも、さらには戦争体験の風化・美化を進める今後の世代が前の世代の「戦中の特攻精神や飢えの苦しみは戦後教育と飽食に育った世代の理解は不可」という声に抗して「戦争体験」を引き継ぐさい、今一度想起されてよいのではないか。

はじめに

カロリン諸島メレオン島は中部太平洋——サイパンとニューギニアの、パラオとトラックのそれぞれ中間に位置する孤島である。⁽¹⁾ 日本軍は第二次大戦中の四四年四月以降、同島に陸海軍約六五〇〇名の兵力を置いていたが、米軍は上陸しないままパラオへと侵攻し、その結果補給を断たれて敗戦までに四四九三名が餓死、病死を遂げた。空襲などによる戦死者は三〇七名、生還者は一六二六名である。あまりに多くの餓死者を出し、加えて下級者ほど餓死の比率が高かったことから、「降服を認めない日本軍の非人間性をもっと強く現れた」との指摘がある。⁽²⁾

しかし同島からの生還者は、戦後その苛酷な体験を忘れ去ろうとしたわけではない。むしろすべてではないにせよ、多くの者が自己の体験を例えば「慰霊誌」などの型式をもって文字に記してきた。なぜそれは書かれたのだろうか。本稿の目的はその過程を追ひ、戦後の日本において〈戦争体験〉記がどのような傾向をもって書かれたのか、そしてそれほどのような意味を持つのかを問うことである。

体験記が歴史研究の対象とされはじめたのは近年のことである。例えば藤井忠俊氏は兵士たちの体験記を用いて戦場の実相をリアルに描いた。⁽³⁾ しかし、ではなぜそれが書かれたのか、という問題意識はさほどないように思われる。吉田裕氏は戦後史の中の日本人の戦争観を検証する中で従軍体験記にも言及、一九八〇年代に入ってからのはかつてと異なり、従軍者の「人生の総括」として日本軍の加害行為に言及する例も多いことを指摘しているが、それが書かれた目的や背景、いわば戦後日本人のある部分における「歴史認識」の問題としての詳しい分析は行っていない。一方、個々の戦域の生還者、遺族による戦死者慰霊の過程については、中野聡氏がフィリピンを事例に分析を行い、確かに彼らは現地

住民と良好な関係を構築したものの、過去の事実が語り合われることはなく、むしろ隠蔽されている、と指摘している。確かにメレオンの場合にも、後述するようにそうした傾向があることは否定できないが、中野氏の分析は現地での遺骨収集や慰霊祭の過程にとどまり、慰霊誌・体験記にまでは及んでいないため、生還者たちが過去の〈戦争〉をどうみていたのかはやはり十分に分析されていない。彼らが自己の戦争体験を「書いた」ことの意味を問うことは、世代交代が進み「戦争体験の風化」が問われているなかで、けっして意味のないことではないと考える。

① 遺族に最期の様子を語る

敗戦にともなうメレオン島での降服式は一九四五年九月一九日に行われた。引き揚げは早く、同月二〇日病院船高砂丸に乗船して大分県別府に上陸、一〇月七日には部隊が解散している。

一九四六年二月、安倍能成が雑誌『世界』第二号に「メレオン島の悲劇・一遺族の手紙」を発表した。これは安倍がある遺族からの手紙にもとづき同島における将校の非道振りを、総兵力六〇〇〇中兵の生還者は八〇〇名だったのに将校はふぐ中毒の二名を除き全員元気で帰った、などと告発したもので、安倍が現職の文部大臣であったためか戦死者の遺族をはじめとして大きな反響を呼んだ。このためにメレオン部隊のもと指揮官、参謀らが直接安倍のもとへ抗議に赴き、第一復員局の法務部が調査に乗り出すという事態にまで発展したが、結局将校たちの言い分を聴取したのみで終息している。しかし四六年七月一日、海軍第四四警備隊司令の宮田嘉信もと大佐が、翌四七年八月一日、陸軍独立混成第五〇旅団長北村勝三もと少将がそれぞれ自殺を遂げた。⁽⁶⁾

生還者・遺族たちが同島戦死者の遺骨収集・慰霊にとりくみはじめたのは高度成長下の六〇年代中ばに入ることである。以下、北海道メ

レヨン会・メレヨン島北海道遺族会「メレヨン島戦没者慰霊の歩み」（一九七七年）からその経緯を跡づけてみたい。

一九六四年三月二日、大阪市に全国から生還者が集まり、全国規模の団体への発展を申し合わせた。その後、北海道、山形、東京、徳島、広島、岡山、山口、九州の各地で戦友会結成の動きが広まった。メレヨン島戦病死者のうち、約一四〇〇名が北海道出身者だったため、とくに北海道内では同島関係者の活動が活発化した。北海道メレヨン会が六五年発足、初代会長は笹谷五郎、第二代は藤沢勝一（もと旅団砲兵隊中隊長）である。生還者を正会員、遺族を暫定的に賛助会員とした。

同じ六五年四月一日、生還者約七〇名が福山市で第二回全国大会を開催、現地墓参と慰霊碑の建設を目標と定めた。これが各地の生還者、遺族を束ねる上部団体として、全国メレヨン会へと発展する（会長田口快三・もと歩兵第三三一大隊機関銃中隊長）。

第一次遺骨収集団は六六年四月一日〜五月一六日に実施された。しかし同島を管轄している米軍の許可が得られず、現地の砂「霊砂」と称した一のみを持ち帰りとなった。同年五月、福山市備後護国神社境内に「メレヨン島戦没者慰霊碑」が建立された。

第二次遺骨収集団は七〇年一〇月三十一日から一月二六日に行われた。今回は遺骨を持ち帰ることができ、良く七一年五月二三日、広島県福山市（これはメレヨン陸軍部隊の基幹となった南洋第五支隊が同市で編成されたためである）の備後護国神社境内で慰霊祭を執行した。

北海道メレヨン会は七一年札幌護国神社境内に慰霊碑を建立したが、遺族たちは別に七三年九月二三日「メレヨン島北海道遺族会」を結成、戦死者の氏名を銅板に刻んだ碑をこの慰霊碑横に建設しようと活動を開始した。この氏名碑は七四年九月二二日に除幕された。

この間、メレヨン島の生還者たちは、戦死者の追悼、すなわち彼らの死の意義付けをどのように行ってきたのであろうか。ここでまず目に

くのは、「礎」論、つまり戦死者のおかげで今日の平和な日本があるのだというあの論理である。例えば一九七三年九月二三日、札幌護国神社における北海道メレヨン会慰霊祭で藤沢勝一会長が朗読した「祭文」は、次のようなものであった。

糧食の補給が完全に途絶し、農工漁撈をもってする現地自活も遂には力尽きて遙か故国の肉身に思いを馳せながら万憊の涙をのんで斃れた戦友諸兄の胸の中を察し申し上げるとき、いまもなお痛恨極まりなく、しばし絶句して言うべき術もありません（中略）私たちが今日あるはすべてあなた方のお陰であります。英霊となられたあなた方のご加護なくして私たちの今日はなかつた筈です。

この点、遺族たちの認識もほぼ同様であった。一九八〇（昭和五五）年一月一日、北海道メレヨン島遺族会長伊藤正次郎はメレヨン島で挙行された慰霊祭において、「悲しみの内にも三十五年の歳月は流れ去って、今の日本は平和な、そして世界随一の経済国へと成長しています。あなた方の命をかけて築いた、戦の無い経済王国は、これからの日本を背負って立つ若い人々が、永遠に守り通してくれる事でしょう」などと述べており、遺族たちも肉親の死を一見納得して受容しているかのように見える。

だがここに至るまでに、遺族の生還者に対する怨念の解消、両者の協調が自然に進んだわけではけっしてない。もと海軍第四四警備隊軍医長の森萬壽夫は、六六年の福山市第一回慰霊祭に参加した際のことを次のように回想している。

私は福山市まで出かけて行って、約二十年振りにメレヨン海軍部隊の戦友と再会した。慰霊祭の前日、打合せの席上で、遺族の方の中には、生還者や士官に対し心にしこりを持っておられる人もあるらしいから、隊長であった人はよく話をしておいたほうがいいという

話も出た。陸軍関係では遺族の方にやや不穏な空気もあるということであった。(「中略」)第一回慰霊祭の祭事終了後、会場となった大天幕の中で、陸海軍別々により集まって、遺族の方たちとの懇談会が開かれた。まず、准士官以上が整列して自己紹介をし、遺族にご挨拶をした。そのあと、息子や兄弟の戦死公報はかくかくしかじかであるがどのようにして死んだのであろうかと、こういう者はいたであろうかと、矢継ぎの質問が浴びせられた。だが、海軍部隊は終戦当時警備隊司令の命令でいっさいの公私文書を焼却してしまっており、同時にまた二十年の歳月は記憶を曖昧なものにしてしまっているため、的確な答えができず、遺族は大変不満を抱かれたようであった。⁽¹⁰⁾

森がこの慰霊祭の後、自分のメレヨン日記を公刊したのは、「霊前に額いて一心に手を合わせておられる老父母、兄弟姉妹、子息、未亡人などの様を見ていると、ぐうっと胸にこみ上げ、涙をとめることが出来なかった。そして、私たち生還者は、自分たちのみ生きて帰ったことを相済まぬと思⁽¹¹⁾い、肉親は「どのようにして死んだのであろうか」という遺族たちの問いに答えようとしたからであった。

森はその後、メレヨン島海軍関係者の戦友会「メレヨン海軍会」の会長となり、戦死者たちの三三回忌を迎えたことを契機に記念誌『追憶』(一九七八年)を編纂した。そこには多数の生還者が思い思いの所感、追想を寄せた。森は序文で「英霊を想い浮かべ、われわれ生還者の戦后過ぎこし年月をふりかえり、戦争というものがわれわれにとって何を遺し何を教えているかを反省して、残りの人生を有意義におくりたい」という趣旨で本書を編纂したという。生き残った兵士たちにとって、なぜ「書くこと」は残りの人生上「有意義」と考えられたのだろうか。⁽¹²⁾

遺族のことを慮り、その肉親たちの最後を纏々つづった兵士がいる。自身を「兵隊」と呼ぶ彼は、栄養失調で髪も眉も赤く薄くなり小屋の中

をはって歩くようになった戦友が髪と爪を「若し帰れる事が有ったら家族に届けてくれ」などと言いつつ残しては次々に死んでいく様を描き、最後にある戦友の九一歳になる父親から聞いてきた「死は私の子ばかりではない。まだまだ二人も三人もの愛子を喪った親も数えきれぬほどあるのである。この世はすべて夢である」との所感を載せている。つまり彼の文章は、前出の森会長と同様に遺族たちのため、「御家族の皆様方に当時現地での私達の生活の一片でもわかかって頂」くべく書かれているのである。この兵士は「戦友の顔を何時迄も忘れぬ為にもと、吾が家の仏壇に勝手乍ら、「戦友の」御法名をそれぞれ頂き過去帳にお祀り」しているのだという。己の手で書くことが彼にとっては慰霊の営みであり、心の平安を得ることなのである。

別の兵士は復員直後、三人の戦友の遺族をまわり、安倍能成の「メレオンの悲劇」を差し出されて「此のような餓死(を)したのでしょか」と問われたり、「お前だけどうして帰って来た、おめえはよかったな」と言われたことを回想している。⁽¹³⁾「三人の昏睡状態に入る前の断末魔の苦悶と遺体を水葬にした」などの「真実を話せない悩み」を抱え続けた彼は、書くことでそれを「話したこと」にしたのではなかったか。

死んだ戦友とはなく、上官との関係をつづり、メレヨン体験の「総括」を終えた兵士もいる。⁽¹⁴⁾彼は直属の分隊長の厳罰ぶりを飛び抜けて長い文章で纏々つづり、最後には六〇日間の絶食を命じた彼を殺して自分たちも死のうとまでした。しかし一九六六年になって和解をとげ、以後は「嘗つての部下達と宴席に連らなり懐旧談に華を咲かせたり」旅行をしたので、「分隊長は合掌して涙して喜んでくれた」のだという。七四年、この「分隊長の逝去によってウ六八警一分隊の生還者は一応精神的終止符を打った」と書くことで、彼は苛酷な体験を「追憶」へと昇華させたのであった。

②戦死者の死、そして戦争の意義とは何か

慰霊祭がはじまった昭和四〇年代以降、遺族たちと生還者の間に紛争が起ることが少なくとも表面的にはなかった背景には、前章でもみたように、死者の最期の様子を知りたいという遺族たちの声に将校や兵士たちが応えようとした結果であるようだ。⁽¹⁵⁾断片的な事例ではあるが、一九四五年一月六日メレヨン島で「戦病死」した山形県東田川郡藤島町出身の兵士の追悼録が作成された際、高射砲隊長の横山秀夫⁽¹⁶⁾は自分の日記から「一月六日早朝、容体急変の報せあり、衛生兵を連れて見舞い、手当を加えるも、午前十時三十五分遂に瞑黙す」と最期の様子を描き、さらに「今年の二月（昭和五十四年）、私は戦後初めて「メレヨン」へ慰霊の旅をした。彼の眠るジャングルの中は昼なお暗く、墓地の場所も定かではなかった。ここぞと思う所へ塔婆を建て、供物を献じ、みんなで般若心経を斉唱した」との報告を寄せている。こうした隊長の姿勢に対して戦死者の妹は「現在も文通があり、最近では現地訪問をされた時の状況等、丁寧な便りをもらいました。立派な方だと感謝いたしております」と述べている。⁽¹⁷⁾

だが、生還者たちの脳裏から遺族の怨念や罪悪感、その象徴としての安倍の文章が忘れ去られたのではなかった。そのことは、彼らの文章からみてとれる。

一九八九年四月二二日、第八次訪島団がメレヨンを訪れ、慰霊祭を行った。参加したのは生還者二、遺族四である。終了後、記念誌『メレヨン島に架ける橋』が刊行された。そこで生還者として参加した乾真一（もと中尉・高射砲小隊長）は、なぜ自身が参加したのかを語っている。

乾は七〇歳、前年会社の社長を退任して以来無聊にさいなまれ、「考え方の切り替え」が必要になったことを「今時訪島は申訳ないが私にとっ

ては亡き戦友のためとか、遺族のためとかでない。私自身のためなのである」というものの、一方では、

メレヨンから生き還った私たちはあの地で亡くなった戦友に対して大きな罪の意識を持たない者はない筈である。彼は死に、我は生き残った。ただそれだけの事実だが、運の善し悪しでは済まされぬ。生涯、返しきれぬ大きな借りができたのである。「中略」今の日本の繁栄平和は果して、これだけの大きな犠牲を払わなければ得られなかったであろうか。死者と生者の隔差の大きさに胸をしめつけられるのである。

こうした「礎論」では実は納得できない痛覚の背景には、メレヨンの「将校の暴虐」説という消えない記憶があった。そもそも彼は四六年の『世界』誌上に将校と下士官兵の死亡率を挙げ、直接安倍に反論を寄せる⁽¹⁸⁾など、生還者への批判に反論してきた人物であるが、戦後四〇年以上経ってなお、そうした「罪」の意識から逃れることができなかった。

昨年（八八年）のはじめ、あるノンフィクションが刊行された。「黙示の海」（千田夏光作・汐文社刊）である。それはメレヨン島における将校の暴虐を告発する男のものがたり。その主人公が、私の直接の部下らしいのである。私も将校の一人。この本にかなり重要な登場人物の一人として（全く取材されていないのだが）私が実名で出ているのだ。これは私の気持をゆさぶるに十分である。⁽¹⁹⁾

このように他者の告発を受けるたび、彼の部下への「罪」意識、痛覚は繰り返し言葉となって表明される。彼は現地慰霊祭で、次のような「慰霊の言葉」を朗読した。

昭和という時代を顧みて私たちの想いは、敗色すでに明らかな昭和十九年（一九四四）三月という時期にこんな小さな島、メレヨン島の守備にどんな戦略的な意味があったのか。叶わぬ練言ながら、せめてあの時期での終戦の聖断があったならと口惜しい想いでありま

す。

自己と部下たちの犠牲の無意味さへのはりさけそうない思ひは、では誰がそれを強いたのか？という思いへと移っていく。乾は先の追悼文に込めた思いを次のように語っている。

昭和が終わり昭和時代、天皇制、戦争が問われている（なかで？）

昭和天皇の終戦聖断を讃える声が大きいが果たしてそうであろうか。私たちメレヨンの将兵は十九年四月、戦局すでに敗色濃い時期に奇的跡的にあの島に上陸した。そしてあの悲惨な状況に陥った。「聖断遅きに失す」聖断が一年早ければとの想いをもたない関係者はいないのである。それに触れることがタブーなのか、私は敢えてこの点に触れて文案を作った。私たちの本当の悔恨と悲憤は戦略の誤りとともに、そのあたりにあるからである。

「昭和」が終わりを告げるなか、彼はなぜメレヨンの悲劇が生まれたのか、を改めて問い、その思索はついに「天皇の戦争責任」にまで行き着いたのである。²⁰その意味で、彼は「戦争責任」の所在をけっしてあいまいにしようとはしていない。もちろん、自己の「責任」もあくまで死んだ部下に対してのものではあれ、忘れられてはいない。彼の「宿罪」という言葉にはそうした思いが凝縮されているのである。

乾もと少尉が「慰霊の言葉」を述べたのとほぼ同じころ、別の隊の陸軍少尉・田邊正之もメレヨン体験記（『鎮魂の島 嗚呼メレヨン島』私家版、一九九四年）を執筆している。それは乾と同じく「先の戦争の総括」でありながら、彼のそれとは若干異なる性格をもっている。

一命を顧みず、青春の情熱の総てを、祖国に捧げて戦ったあの頃のことは、終生忘却出来ないものがある。例え、その戦争が、悪夢のようなむなし敗戦に終わろうとも。聖戦と信じ、砲煙彈雨の中を駆け巡って来た吾々無名戦士には何の罪もない。むしろ、吾々には名誉な栄光の時代であったように思えた。然しながら、二度と戦争

を起こしてはならない。それは戦争の悲惨さを身を以て、いやとい

う程体験させられた吾々の願いであり、叫びでもある。（前掲書一頁）

「例え」「然しながら」という文言に、先の戦争を決して「聖戦」「栄光の時代」とのみ総括することのできない葛藤をみてとれるのではないか。そもそも、もとは旧制中学出の下士官だった彼が少尉に任官したのは、「この島で餓死の日を待つより、何としてもこの島を脱出したい」、その唯一の道が少尉候補者の試験を受けて少尉となり（メレヨン島で試験が行われ、四五年二月合格―任官した）、内地の子科士官学校に入ることだった、という身もふたもない理由（九頁）からであった。

田邊は将校として死んだ部下たちをどうみていたのか。彼は参謀の食糧を盗んだ兵に対する参謀の厳罰主義をみて「異常だと思えた」「参謀の無情のこの処罰を『食を与えずしてこのような非常なことがよくも出来るものだと：』参謀を恨んでもみた」、しかし「暴動が何時起きても不思議でない不穏な空気が漂っていたが、参謀の厳罰主義がその暴動を抑える抑止力になっていたことも事実である」（四七頁）という。ここでも、「しかし」という言葉が用いられ、それは（将校の特権ゆえ）生き残りえたことへの罪悪感の表出、弁明であろう。それはある死んだ軍曹の婚約者に対する「食糧さえあれば共に生きて帰還出来たものをと：」「中略」飢えと病魔に斃れたその死は、余りにも悲しく不憫に想われ追慕の涙を禁じ得ない」という記述（四九頁）からもうかがえる。

つまり、乾も田邊も、それをストレートに認めるか認めないかはやや異なるものの、ともに「先の戦争の意義」に対する疑念を持って戦後を生きてきたのである。

こののちも、全国メレヨン会は現地慰霊祭を含む慰霊活動を継続していく。一九九二年九月二八日から一〇月一日にかけて、大阪で全国メレヨン会総会が開催された。このときメレヨン島民の代表二名（ミクロネシア連邦ヤップ島知事代行、フララップ島第一酋長²¹）を招待した。これ

は一〇次にわたる遺族・生還者訪島の際の協力に対する返礼であった。⁽²¹⁾
二〇〇二年には福山市の慰霊碑前で第三回メレヨン会・戦没者氏名碑の完成慰霊祭が行われた。⁽²²⁾

この過程を通じ、生還者・遺族たちとメレヨン島住民との間には、慰霊祭のたびに生活用品や文房具を持参し、現地民は慰霊碑の維持に協力するなど、中野聡氏というところの「互酬」関係が成立して良好であるようにみえるが、では戦争中現地民がどうして生活していたのか、という点は、じつのところ体験記、慰霊記念誌からはほとんど何も分からない。わずかに「島民は全部、離れ島フラリスに移動させた。」〔中略〕この処置は、日本軍指揮官の適切な配慮で、以後島民は日本兵の様な惨状にならず、終戦後半世紀に及ぶ友好な絆を保つことになった⁽²³⁾といった記述がある程度で、現地に日本人が与えた損害についての自覚があまりないことは指摘しておかねばならない。⁽²⁴⁾

さらに、慰霊誌の中には「メレヨン、フララップには近く、自家発電所が出来る。〔中略〕しかし、電気がついたメレヨン島を考えると、メレヨンの魅力は全くなくなる。電気も車も、ホテルも何もない原始と近いことが、このうえない郷愁をそそのめるのだ」といった発言もあり、メレヨンが「他人」の暮らす土地であるという認識に欠けているのではないか、という感もなくはない。

③戦後五〇年・一兵士の語り

メレヨン島生還者の一人に、今野清次郎というもと陸軍兵士がいる。彼は一九二二年北海道に生まれ、野砲兵第四二連隊第三大隊第七中隊の上等兵（のち兵長）として満州へ、続いてメレヨン島へ渡った。中隊の同年兵二六名のうち、生き残ったのは彼一人であった。戦後は千葉県に住み、大同電気工業東金工場長などを務めた。

彼は地元の新報・千葉日報に自己の従軍体験を一三六回にわたり「メレヨンの戦い」などと題して連載し、それは『幻の本土決戦 房総半島の防衛第七巻』（千葉日報社、一九九三年）の一部として公刊された。以後も彼は『メレヨンの戦い 敵の上陸なき玉碎餓死の島』（多田屋、一九九五年）、『鎮魂の半世紀 飢餓の島メレヨンの英霊に捧ぐ』（私家版、二〇〇一年）、『メレヨン 飢餓残兵を救ふ 決死の補給潜記』（私家版、二〇〇二年、今野の著作は以下今野・発行年と略記）と体験をリライトし続けた。なぜ彼はそれを続けたのだろうか。

その動機となったのは、「近く我々の世代は終わる。人それぞれの立場で思想、記述も異なる。短い人生の体験だが自分で見、感じた事を率直に述べ後世の判断資料として次代に残す事が今出来る唯一の務めと心得る」（今野二〇〇二、一三二頁）という使命感であるとともに、「メレヨン戦没者は無駄死と云う声を聞き、亡き戦友に申し訳ないと」（同一二九頁）いう意識であった。

彼の体験談が書かれた目的は二つあるように思う。一つは、死んだ者の死の意味づけ、慰霊である。彼らはじつさいのところ「無駄死」であったのか、なかったのか。この点に関する今野の考えはどうか。

メレヨンという名も知られぬ小島に、七〇〇名者陸海軍将兵を配備し、守る価値があったのか。その疑問に応えるには、サイパン島の存在を欠かすことはできない。〔中略〕要衝・サイパン島もいずれば危うくなる——との判断さえついていけば、サイパンからの補給がなければやってゆけないメレヨンへの派兵も、あるいはなかったのではないか。以上は常識的な解釈と言えないこともないが、実際にその島へ守備隊の一員として投入され、さらに生き残った者とするれば、大本営の作戦計画は当時の国力、戦力としてはやむを得ないものだったと思う。いや、そう思わなければ、メレヨン島に骨を埋めた多くの戦友は犬死にとり、残された遺族には申し訳が立た

ない。戦争は後で何とでも言えるが、当事者でなければ分からない面があるはず。従って、その評価が正しいか否か断ずるのは難しい。

(今野一九九三、三三〇頁)

先の乾中尉と同様、大本営の作戦能力、メレヨンの「戦略的」価値については程度の差こそあれ懐疑的である。しかしそれを認めてしまえば戦友たちの死は「犬死」になってしまうという葛藤が、このような曖昧な筆致となって現れている。それでも今野は、発狂する者、死期をさとり自ら埋葬地に行つて息絶えた者、南瓜一個をねだつて断られ自殺する者、最後に煙草と南瓜の葉の汁をわけてもらい満足して息をひきとつた者、と文字通りの「飢餓地獄」のなかで死んでいった者たちを淡々と回想している。彼らの名前の多くには出身地と顔写真が付けられており、それはおそらくゆかりの者に対する死の状況報告という意味合いがあるのだろう。それが彼なりの「慰霊」の方法であった。

もう一つの体験談が書かれた理由は、自分が生き残ったことへのいわば「自己弁護」のようなものである。確かに彼は「生還者は実に多くの戦友を失い、自分たちだけが生き残った」引け目を感じていた。しかし、最下級に属したわれわれ兵からみれば、一概にそうとも言えないものがある。当時の状況は、それぞれの立場で最善に近い努力をしていたと、今でも信じている」と書いている。しかしこの一文にこそ、逆に「生き残ったこと」への後ろめたさが表れているのではないか。

この「後ろめたさ」について、もう少し敷衍しておきたい。それは、彼がなぜ自分が生き残れたかを語っている部分についてである。

一度目は、ノンフィクション作家の千田夏光に対してである。一九八三年ごろ千田は千葉県の「中企業クラスの電機工場で総務部長」をしている「Bさん」にメレヨンの話を聞きに行つた(もと兵長で野砲中隊にいたことなど話のディテールからみて、彼が今野とみてよいと考える)。今野は「会社に作家と名乗る人がメレヨン事情を聞きに来たが、反戦作

家に曲解、宣伝されると思って語らなかつた」(今野二〇〇二、一二九頁)とはいうが、まったく何も語らなかつたわけではないようである。

「どんな兵隊が生き残り得たのか」という千田の問いに対して、

① 徹底的に部隊の倉庫をはじめ各所から食糧を盗みまくつた者

② 幹部の「ひご」のもとにあった兵隊、ただし男色のなものでなく、

将校の弱みを握つていた者

③ 現地の貝やカタツムリ、食べられる草などを徹底的にあさつた者

ただし③は何人もおらず、もつとも多かつたのは①と②であつただけ

という。

では今野自身はどれに当てはまるのか、という千田の問いに、この時点では「ある程度幹部のひごをうけたことは事実ですが、背が低かつたことがいえると思います。〔中略〕同じ量の食糧なら体の小さい者の方がはつきりもちます」と答えている。

ところがその数年後、今度は今野自身が『千葉日報』紙上でその理由を語ることになる。

「飢餓の島」メレヨンから生還できたのは、容易なことではない。

極端に少なかつた主食の定量だけで、自身の人間が生きられるはずもない。その生き残りの条件とは――①自分の体を自由にできる立場の幹部。つまり、休みたいときに休める者②若干でも食糧に關係のある経理、炊事、運搬に携わることができた者③徹底的に盗んで食つた者。空襲時でも、爆死を覚悟で食糧あさりした者④現地自活で農耕、漁労に励み、農産物、カロリを補えた者⑤体が丈夫な者。衛生管理を徹底したほか、体力の消耗を少なくした者(衛生部員も含む)。主食の定量だけでは、メレヨン島では生きられない。生き残るためにはトカゲ、ネズミであろうと、口に入る者は何でも食べた。幸い、私には生き残りの条件が三つばかりあつたため、故国の土を踏むことができたのだ。(今野一九九三、三三〇頁)

①は兵である以上該当しないし、②も彼の記録を読む限り該当しない。すなわち、時間が経過してはじめて彼は「盗んで食った」、ゆえに生き残れたと暗に告白しているのである。それをわざわざ公に「書いた」とは、ひとつの懺悔ではなかったろうか。

なお、『幻の本土決戦』第七巻が刊行されたのと同じ一九九三年、同じく兵（陸軍一等兵）だった大浦庸生が自己のメレヨン体験を『飢餓の島 メレヨンからの生還』（新風書房）と題して公刊している。徳島出身の大浦は病弱であったが、在島の途中で食糧が比較的豊富な船舶隊（各島に食糧を分配輸送する際隠匿していたらしい）に転属したため、餓死をまぬがれた。彼は体験記を終えるにあたって、「メレヨンの悲劇は、激戦を陽とすれば、それは陰の悲惨さである。銃弾との戦いではなく飢餓との戦い、そんな戦場のあったことを忘れてはならないと思う。〔中略〕兵士の死にも、運・不運があるが、好んで病に倒れたわけではない。私は戦死も、餓死も望まなかった」、「幸運にも私は転属したことにより飢餓から逃れることができ、生きられた」（二二三頁）と述べている。今野と同様、自分だけが生き残ったことに対する、後ろめたさともまではいわないまでも、ある痛みが体験をつづらせたのである。

④ 戦後日本はどうとらえられたか

今野に触発されるかたちで別の体験者がメレヨンを語った。それはもと海軍中尉の泉五郎で、四五年五月、メレヨンに最後の食糧を輸送した潜水艦・伊三六九の航海長であった人物である。今野二〇〇二は泉と今野がそれぞれの体験、所感を語ったいわば共著である。

彼は敗戦から半世紀たってなお海軍兵学校のクラス会誌などに、ガダル（カナル）でのあの苦い苦い経験戦訓は何処へ行ったのか。戦局の推移によっては或いは現地調達自活の道もやむを得ない。然

しこのメレヨンについていえば、この島で食糧の補給なしに、現地調達で何名の人間が自活出来ると考えていたのか？〔中略〕兎に角防衛戦の強化の為、まず頭数を揃えるのが先決、と言うのが恐らく本音であつたらう。〔中略〕一将功成りて万骨枯るのならまだしも、一将の功も成らずして万骨を枯らしめたその罪は一体誰が負つたのか？それは当然このメレヨンに、斯くも無責任に膨大な部隊を送り込んだ、作戦指導部が負わなければならない。²⁶⁾

とメレヨンの悲劇の責任の所在を追及していたが、二〇〇二年福山で行われたメレヨン会の慰霊祭で今野と知り合い、彼の『メレヨンの戦い』や『半世紀』を読んで再び筆をとることにしたのだという。そこでも繰り返されるのは、メレヨンの悲劇の責任追求であり、先の乾陸軍中尉と同様、天皇にまでその矛先は及ぶ。泉は「〔降服という〕これほどの決断と実行が可能な天皇が、何故もつと早く終戦の決断を下さなかったのか、これまた君主として誠に怠慢であつたと言わねばならない。況や戦後いち早く人間天皇を宣言するくらいなら、戦時中も人間として己の責任を自覚すべきであつた。どれだけの人間が、天皇陛下の御為と云うことで死んでいったか、それを一番よく知っているのは天皇自身であつた筈である」（二二二・二二三頁）と天皇批判を率直かつ辛辣に繰り広げている。泉は先の戦争における「軍閥」の敗戦責任を追及しなかったことが現在に至る官僚の独走を許してしまった、「昔軍閥今官閥」と悲憤しており、ここが彼の〈戦後日本〉論のユニークなところである。

だが、泉の戦争・戦後論が今日的視点から見ても一筋縄でいかないのは、安倍能成批判の下りである。彼は「時の文部大臣安倍能成が事実を甚だ歪曲した一兵士の、虚言を真に受けた遺族の投書をとりあげ、軽々に真相の究明を迫つたことになつとくがいかない。その文章は如何にも学者らしい客観的な表現ではあるが、およそ現地の実情を知らず、軍隊の本質を知らぬ、所謂文化人のアジテーションで、結果的には紙の爆弾、ペ

ンの刃となつて、あたふ二人の陸海軍現地指揮官の命を奪つたように思えてならない」と批判してやまない。なぜなら、安倍は当時の軍隊の実態を知らないからである。

私は彼〔安倍〕はたいして軍隊生活の経験が無かつたとしか思えない。当時の思想的には軍人勅諭や戦陣訓で洗脳、これに加えて上司の暴力的制裁すら当然とされた絶対服従制度、これらの上に成り立つ軍隊生活の厳しさは、実際に経験してみないと判らないことであろう。然し、その厳しさに耐え、更に我が身を犠牲にしても、上官に対する忠誠心に燃えた皇軍兵士の多くいたことも事実である。

〔中略〕しかしメレオン派遣部隊の如く、応召の弱兵を相当数かかえこんだ場合、その部隊に苛酷な状況が続くと、忽ちその精強さが内部より崩壊する事態に立ち至つても、誰がこれを非難することが出来ようか。況や長期間、懐愴極まりない極限状況下のメレオンにおいて、軍律の維持、士気の高揚など、その困難さが内地の文化人に判る筈がなからう。

つまり、将校の対応はあの極限状況下ではやむを得なかつた、「メレオン島悲劇の責任は一にかかつて斯かる無謀な兵力展開を命令した大本営以下、陸海軍の作戦遂行者の官僚的無能に帰すべきである」(一二三～一二六頁)というのが彼の結論である。このような罵倒がなされるのは、第一には海兵の同期生がメレオン海軍部隊指揮官の副官だったからなのだが、それ以上に(戦後)日本の価値観の激変——「世相に迎合する時のマスコミや共産党のあらぬ誹謗中傷」という表現がある——によって自己の戦争体験、あるいは人生それ自体が否定されたことに対する、下級将校としてのやりきれなさを一連の文章に込めているからなのである。つまり、軍隊の非情さへの批判には至っていない。

こうした日本軍隊観は、海軍将校という、軍隊内の支配階級としての限界であるかというともそうでもない。兵の身分であるはずの今野もほぼ

同様の感想を持っているからである。

今野は回想記の中で敗戦直後の状況を回顧し、安倍能成の文章のような生還者非難に遭遇してはその「申し訳な」さを募らせていたと言うが、一方では「私は三年兵でメレオンでは最下位の兵隊だった。不満はあったが生残れた事に感謝している。己の怨恨を息子を亡くして悲嘆する遺族に煽り左翼報道に利用され時の安倍文相を巻き込んで騒ぎ立てた。

〔旅団長〕閣下、伊藤参謀、乾氏が反論した、法務調査室も遺族の手紙をもとに幹部の出頭を求め調査した結果あの状況下軍紀維持としては当然の措置と結論した。この件は遺族の不満だけでなく敗戦による軍、政府に対する感情、遺族への対応等が考えられる」(一一四・一一五頁)と兵でありながら将校の処置を「当然」視、是認してもいる。将校の措置を非道と認めてしまえば、軍隊・戦争およびそれに対する自己の献身の価値をおとしめることになるし、あるいはなぜ自分は生きて帰れたのか、という問いに真正面から向き合わねばならなくなるからでもある。

だから今野は(戦前)の全否定の上に成り立つところの戦後民主主義には絶対的な嫌悪感を繰り返して示している。煩雑になるのでここで詳しくはふれないが、今野は戦後の東京裁判史観や平和主義、教育、外交を排撃し、「マッカーサーが」帰国三年目にあの戦争は日本の自営の戦いであり東京裁判(は)あやまちであったといい、公式席上で認めている」などと戦前・戦中の日本を弁護してやまない。⁽²⁹⁾

このように戦後五〇年を経て「先の戦争」をふりかえつた生還者・体験者たちはメレオンの悲劇の最終的な責任のありかを「大本営」の参謀に——乾や泉にあつては天皇にも——求めており、決して「戦争」「軍隊」の存在それ自体には求めていない。その意味では彼らの記述を単純な「反戦論」と決めつけることはできない。おそらく、そこには先の田邊少尉、泉中尉と同様、自己の戦争体験、というより人生それ自体が無意味だった、ということになってしまふことへの拒絶感があるのだろう。

それを彼らの「世代」ゆえの限界と片付けてしまえばそれまでだが、筆者はそうは考えない。今野の記述には、なおわれわれが彼がいうところの「後世の判断材料」として汲み取るべきものがあると考えらるからだ。それは例えば、「戦場に赴く将兵は最終は靖国神社で逢う事を合言葉としていた。唯メレヨン戦没将兵は家族と食物に思いを残し靖国まで想いが及ばなかったのではないか⁽³⁰⁾」という発言である。

今野は「靖国神社は日本人の心の寄り所であり他国に干渉される事ではない」「今新たに慰霊所の話もあるが魂のない施設は必要ない」(一三五頁)というが、それは彼ら生き残りをはじめとする「生者」の論理であって、メレヨンの死者の論理と果たして一致するの、という問いを、はからずも「目撃者」にしかなしえない体験談として突きつけるからである。

おわりに

メレヨン島から生還した将校・兵士たちをして体験記の筆をとらしめたのは、死んだ戦友、その遺族に対する「申し訳なき」の感情であり、そこから死の様子が描かれ、後世に伝えられることになった。あるいは自己の苛酷な体験を「追憶」へ変えたいというひそかな願いもあった。自己の体験をなんとか意義付けたい、しかし戦友の死の悲惨さは被い隠せない、と揺れる心情もみてとれた。このように生還者たちの記した「体験」の性格は多面的であり、容易に単純化・一本化できるような性質のものではない。戦後行われてきた戦死者「慰霊」の背後には、そうした複雑な思いがあったのである。

いくつかの体験記を通じて浮かびあがってきたのは、「昭和」が終わり、戦後五〇年以上たつてなおやまない、「戦争責任」への執拗な問いである。その矛先は、時に天皇にまで及んだ。たとえそこで外国への、

あるいは己れの戦争責任が問われることがなかったとしても、「責任を問うこと」へのこだわりや「死んでいく者の念頭に靖国はなかつたらう」という当事者たちの文章は、戦後日本における「先の戦争」観の実相を問ううえでも、さらには戦争体験の風化・美化を進める今後の世代が前の世代の「戦中の特攻精神や飢えの苦しみは戦後教育と飽食に育った世代の理解は不可⁽³¹⁾」という声に抗してその「体験」を引き継ぐさい、今一度想起されてよいのではないか。今回はメレヨンの事例に限定して考察を行ったが、他の慰霊誌についてもおそらく同様のことが言えよう。

註

- (1) 正確に言うと大小約二〇の小島からなる環礁で、そのため現在ではウォレアイ環礁と呼ばれることが多いが、本稿では関係者の呼称にしたがいメレヨン島と記述する。
- (2) 藤原彰「餓死した英霊たち」(青木書店、二〇〇一年)九八頁。メレヨンは日本軍の非人間的体質の象徴視されている。
- (3) 藤井「兵たちの戦争 手紙・日記・体験記を読み解く」(朝日選書、二〇〇〇年)。
- (4) 吉田「日本人の戦争観 戦後史の中の変容」(岩波書店、一九九五年)一九二―一九七頁。
- (5) 中野「フライピン戦没日本人慰霊の営みと戦争責任の記憶」(『季刊戦争責任研究』三七、二〇〇二年)。
- (6) この間の経緯は、朝日新聞社編「メレヨン島 生と死の記録」(一九六六年)「解説」、千田夏光「海の黙示」(千田「海の黙示」沙文社、一九八八年、所収)に整理されている。
- (7) 第三次遺骨収束団は一九七五年一月二六日―二月一五日に実施され、収集してきた遺骨を千島ヶ淵戦没者墓苑に納めた。
- (8) 北海道メレヨン会「慰霊の軌跡」三九・四〇頁。
- (9) 「在天の英霊に捧ぐ」と題する式辞、北海道メレヨン会「昭和五十五年十月巡拝記念 航跡」(一九八一年)八頁。
- (10) 森「人間の極限 メレヨン島海軍軍医長の記録」(恒友出版、一九七六年)二五五・二五六頁。本書はメレヨン在留中の日記を翻刻したもの。
- (11) 前註に同じ。

- (12) 大沢栄治「私のメレオン島日記」(『追憶』六六〜七五頁)。
- (13) 青木忠久(召集兵)「観音像」(『追憶』一七〇〜一七五頁)。
- (14) 三枝清(妻子のある召集兵)「愛国丸と四四十一警備隊」(『追憶』一八三〜二二六頁)。
- (15) 一九四六年の「世界」第六号に北村もと旅団長が寄せた安倍能成への反駁文には、一部の中隊長が戦死者の遺族に連絡を取らなかったことを詫げる旨の文章があり、遺族からは生還者から最期の様子の報告がないことへの批判が噴出していったらしい。
- (16) 特に明記されていないが、彼が前掲「メレオン島戦没者慰霊の歩み」の編者である。
- (17) 山形県東田川郡藤島町「藤島町戦没者追悼誌」(一九八一年)三二二・三二三頁。
- (18) 「メレオン島事件について」(『世界』六、一九四六年)。なお、旅団長の北村少将もこのとき「守備隊長の立場から」と題して自分の統率が至らなかったことと、一部の中隊長が遺族に連絡を取っていないことをわびる書簡を寄せている。
- (19) たしかに千田「黙示の海」に乾は実名で登場するが、それは部下への加害者としてではなく、「若椰子」というメレオン会発行の小冊子に書いた「宿罪」という彼の言葉がそれまで将校の非道を告発していた部下の心を動かした、というストーリーにおいてであった(二五二・二五三頁)。しかし千田は乾のことを、かつて安倍能成に抗議した「あの方」と紹介しており、それは敗戦直後の「メレオン論争」に関する乾の記憶を喚起したのではなかったろうか。
- (20) 乾は事前に田口全国メレオン会会長にこの文案を送ったところ、「文案は結構」だが自分は戦後一度もメレオン島に行っていないので会長名とするのは不適當である、ついでには乾の名で朗読するようにと言われたという(『メレオン島に架ける橋』七一頁)。その意味でこの「慰霊の言葉」は全国メレオン会の「公式見解」ととれなくもない。
- (21) これ以前にも、七九年二月第四次メレオン慰霊墓参団三六名が訪島、観音像を購入して墓地に安置した。八二年一月第六次墓参団が現地に「慰霊メレオンの鐘」を設置するなど慰霊行為が繰り返されており、招待は協力的な現地民に対する返礼であった(今野清次郎(生還した陸軍兵長、彼については後述する)「統・メレオンの戦い」第七三回、千葉日報社「幻の本土決戦」一九九三年)。
- (22) 今野「メレオン飢餓残兵を救ふ 決死の補給潜記」(二〇〇二年)。ただしこのとき、各地のメレオン会は会員の高齢化のため活動の停止を余儀なくされ、遺族、生還者の多くいた北海道、福山は継続可能なものの、山形と合併した東京、大阪と合併した東海は「活動は無理」、九州はなく、四国も一本化した「活動は無理」という状態となっていた(一一七頁)。
- (23) 今野清次郎「敵の上陸なき餓死の島 メレオンの戦い」(多田屋、一九九五年)二〇一頁。
- (24) とはいえ、椰子、パンの実を餅にして保存しておく方法を現地民は絶対に教えてくれず、日本兵がこれを食べってしまった頃あいをみては物々交換に來ていた、との海軍兵士の回想談もある(前掲「追憶」七二頁)。
- (25) 全国メレオン会「メレオン島に架ける橋」(一九八九年)一〇九頁。
- (26) 千田「メレオンからの電話」(『問題小説』一九八三年八月号、その後単行本「統殺」汐文社、一九八六年、に収録)。
- (27) 今野一九九三には、ただ一か所だけだが、上官に促されたとはいえ南瓜を盗みに行つて失敗し、木に三日間縛りつけられる罰を受けた旨の記述がある(三〇八頁)。
- (28) 今野二〇〇二、一二三頁。この文章は「平成六年ごろ書かれた」もので、「田中俊春君とメレオン島」と題するその全文は二〇〇五年五月現在、海軍兵学校二期・海軍機関学校五三期・海軍経理学校三三期の合同クラス会「なにわ会」ホームページ(<http://www.sfbglobe.ne.jp/~mat80/buko-tanakaosharuzumii.html>)にて公開されている。
- (29) 今野一九九五は、全四章のうち第一章「アジアの旋風」を自身の在満州部隊への入隊から始め、ついで前近代のロシアの満州進出から日清・日露戦争、ノモンハン事件に至る歴史叙述に宛てている。それは、彼なりに自己の戦争体験を大きな歴史の中に位置づけ、なぜ己が戦争に行かざるを得なかったのかを問う直す試みであった。そこでの太平洋戦争はルーズベルトの挑発によってやむなく始めた戦いであるし、蒋介石が「日本に感謝し、戦時賠償はいらぬと言った」、「最近の中国指導者(毛沢東らしい)も「現在の中国があるのは日本のお陰」と発言した」、しかるに現在の日本は「謝罪外交を続けている。日本の将来はどうなるのか」といった記述がある(八三頁)。それは、かつての軍、国家、そしてなによりそれに身を委ねた自己の弁護なのではないか。ある意味で本書は戦死者のためだけでなく、彼自身の「歴史実践」のためにも書かれているのである。
- (30) 今野二〇〇二、一三五頁。この記述は、「メレオン戦友の最後は靖国神社より一杯の重湯と家族への想いを残したと思う」と別の箇所(同書一三五頁)でも繰り返されている。
- (31) 今野二〇〇二「はじめに」。

(国立歴史民俗博物館研究部)
二〇〇五年三月三十一日受理、二〇〇五年七月一五日審査終了

Why Talk About an Island Where Soldiers Starved to Death ? : Reminiscences of Survivors from Mereyon Island

ICHINOSE Toshiya

Former officers and soldiers who survived their time on Mereyon Island during the Pacific War, when the disruption of supplies ended in the death through starvation and disease of many in the Japanese army, have put pen to paper to record their experiences. These reminiscences contain sentiments of "apology" to their fallen comrades in arms and their families, and describe the circumstances of their deaths, which can be passed on to future generations. They also represent a hidden desire to transform their own harsh experiences into "reminiscences". They also tremble with emotion as they seek to give some meaning to their own experiences and are not able to hide the tragedy of the deaths of their fellow soldiers. In this way, the characteristics of the recorded "experiences" of these survivors are varied, and cannot be easily simplified or unified. Such complex emotions are to be found behind post-war "memorials" to the war dead.

One theme that reveals itself from several records of their experiences on Mereyon Island is the persistent question of responsibility for the war, which is still asked today, 17 years after the end of the Showa period and more than half a century after the war. At times, the brunt of this question is directed as high up as to the emperor. Even if foreign countries or the soldiers themselves have not been brought to task over responsibility for the war in their writings, the obsession with "asking who was responsible" and the words of the people of that time that say "Those about to die would not have thought about Yasukuni (Shrine)" question the reality of the view in post-war Japan of "the next war". Their writings should be remembered once again when inheriting "war experiences", as future generations subjected to the toning down and romanticizing of war experiences are faced with voices from the preceding generation claiming that "It is impossible for those generations educated after the war who have only known full stomachs to understand the suicidal spirit and suffering of starvation that were present during the war".